

## 四面楚歌、強気の陰で“火消し”に躍起の末期症状

森友学園疑惑は、次から次へ炎上し、安倍首相夫妻を追い詰めている。学園と理事長に大阪府が調査に入り、理事長と府職員の“バトル”が行われている中で記者会見した理事長が小学校の認可申請を取り下げ“幕引き”が始まった。だが、世間の眼は、幕引きどころか、安倍－松井（大阪府知事、維新共同代表）－籠池理事長の深い関係や、他の学園疑惑にも波及し、疑獄の様相を呈し始めた。

その矢先の10日には、籠池理事長の記者会見が始まった最中に、安倍首相が臨時記者会見を行い「南スーダンPKOの撤収」を発表し、ニュースの焦点を変えてしまった。5月の撤収を夜の臨時会見で急ぎ発表する緊急性があったのかどうかなど、憶測を呼ぶどたばた劇が演じられた。この日は同時に、韓国大統領の弾劾、解任が決定するという歴史的な転換点の日でもあった。韓国政治の転換は、一昨年末の日韓合意が1年余で覆るだけでなく、日米韓や日中韓の関係にも大きなインパクトがあり、安倍外交の行き詰まりがこれから表面化していく。

こうした動きの中で、永田町では「潮目が変わった」という声が広がっているという。

安倍政権の「一強体制」が砂上の楼閣であり、アベノミクスという経済政策の破綻をはじめ、ウソとごまかしで固められた安倍政権の延命策がすでに限界に達していることは、安倍政治を批判的に見てきた人たちの眼には先刻承知のことだが、いよいよ永田町や霞が関の中で「井の中の蛙」であった人たちにも否定しがたい状況に至ったということだろう。

4年前の9月、ブエノスアイレスでの東京五輪招致演説で「フクシマについて、お案じの向きには、私から保証をいたします。状況は、統御されています。東京には、いかなる悪影響にしる、これまで及ぼしたことはなく、今後とも、及ぼすことはありません。…」と、フクシマは「アンダーコントロール下にある」と首相は胸を張った。立ち並ぶ汚染水タンクのあちこちから汚染水が漏れ、地下水は山側から容赦なく流れ込み、それが汚染されて港湾に流れ出る事態が今も続く。廃炉計画の先行きは読めない。「アウト・オブ・コントロール」（制御不能）状態にあるのは明らかだ。

そんな中で迎えた東日本大震災6周年の11日には、恒例の首相会見を取りやめた。もはや、逃げるが勝ちの態勢に入ったのかと思わんばかりである。

3月12日、民進党が党大会を開いた。昨年3月、旧民主党と旧維新の党が合流して発足して以来、初めての定期党大会だ。蓮舫代表はあいさつの中で「人口減少社会にふさわしい未来社会をつくるために、原発依存からの脱却を前倒し可能となるよう原発ゼロ基本法案の提出をめざすとともに、すべての子どもの学びを保障する教育無償化に取り組む」ことを宣言した。年内解散を想定した衆院選へ向けて、共産党を含む野党共闘の強化を加速する活動方針も決めた。

安倍政治を終わらせるために、野党共闘を揺るぎないものにするためにも、市民の立ち上がりは今こそ求められる。市民のうねりが政権交代をもたらした韓国に続こう。

松本 誠（連帯兵庫みなせん事務局長）